

「ゴー、ウエスト！ ヨーロッパ激烈2週間」の巻

其の七

ロンドンを後にし、再びユーロスターでパリに舞戻る。

今頃になって旅の疲れが出てきたので、明日のフライトに向けてパリ市内ではなく、郊外のシャルル・ド・ゴール空港近くの安ホテルにチェックインした。ホントはパリで少し最後の遊びをしたかったけど、何より健康第一。

今晚から、いよいよ日本に向けての長旅に備えなくてはならない。

この旅最後のベットに潜り、テレビのチャンネルをパチパチ変えながら旅の記憶を手繰り寄せる。

「色んなことがあったもんなあ・・・」

思いに耽りながら、いよいよ終わりともなるとちょっと寂しいものだ。番組はさすがに空港近辺ということもあってか、フランス、イタリア、ドイツ、イギリス各国の放送が入る。たった1週間前の出来事なのに、イタリアの番組を見ていると郷愁にかられてしまう。

「イタリア帰りたいよ、マンマ・ミーア」

そんなワガママが通る筈もない、翌朝にはシャトルバスに揺られて空港ロビーにいた。搭乗予定のミラノ行きの便が随分遅れているらしい。暇を持て余しながら、空港のカフェで最後のコーヒーを飲む。

あ、ちなみに、イタリアでも、フランスでもオーダーする時に

「カフェ1つちよーだい」

というと、必ずエスプレッソが出てくる。一見すると量的にガッカリ感も否めないけど、実はカフェインの量もいわゆる普通のコーヒーより少なく、またその濃厚な味わいは一度はまると病み付きになる。

結局、我がアリタリア航空、ミラノ行きは定刻より大幅に遅れて、昼過ぎの出発と相成った。

またしても雄大な山脈を越え、眼下には緑と茶色のコントラストが飛び込んでくる。もうそこはイタリアの大地なのだ。

ミラノ空港では大幅に到着の遅れた私達の便のおかげで、関空行き便は更に遅れることになったが、無事搭乗も済み、12時間の忍耐の末、ようやく関空に降り立った。

「あ、暑い・・・」

大方の人間のきつと第一声はこうなる筈だ。空の色も違う。ああ、帰ってきたんだな、と実感する。

ところで、関空から京都までは直通の特急はるか号を使ったのだけど、右前座席に座る夫婦が朝刊を読んでいたの、こっそり盗み読みしていた。そこには一面に「パリでコンコルド墜落」と大きな見出しが出ているじゃないか。

一瞬「え？」とたじろぐ。そして一気に背筋が凍る。

だって、その事故が起こるホンの数時間前まで、その空港に居たんだから。

まあ、コンコルドに乗る用事は無い(金額的にも無理だな)にしても、もし現場に居たら二次的な何らかの被害は免れなかった筈だからだ。

やはり、いくら飛行技術が進み、安全率が高いといえど、やはり所詮人間の作るものに完璧なモノなど無いということを感じ知らされた様な気がしてならない。

クルマもそうだけど、結局人間がそこに介在している以上、事故、故障という要因は絶対に無くならない。絶対という言葉は日頃嫌いなので余り使わないけど、この事実はまさに絶対だと断言できる。

勿論、だからこそ人間はより完璧を求めるべく努力するのだけど、どうしてもこの矛盾は拭い去ることは出来ないだろう。日頃レースというものに深く関わる者として、その内に秘める危険性について再認識させられるには充分過ぎるほど、ショックな出来事となった。

[さいごに]

さて、この短い旅の記録はココまでです。本当はもっと詳しく書きたい事柄、(イタリアでは APEROL-SODA は死ぬほどマズイとか、毎朝かぼちゃワインが見られる・・・とか)などいっぱいあったのですが、今回はこれくらいにしときます。

帰国して、皆に尋ねられるのは「何処が一番だった？」という質問でしたが、とても順位を付けることなどおこがましく感じるほど、全ての国、地方それぞれ特色があり、それは素晴らしい体験でした。

毎度のことですが、どこかへ行く度に「新しい発見」の連続で、やはり「百聞は一見にしかず」とはよく言ったものだと痛感します。そうそう、あえて言うなら、「イタリア最高っー！！」

私の場合、いつも旅の目的の半分以上がレース関係が絡んでいるので、いわゆる「観光スポット」には余り縁が無いのですが、でも、だからこそ普通よりディープな体験をすることが多く、それはそれでいいのかな、とも思います。

最後に、泊めてくれて有難うカヘー君、少ししか話せなかったけど<Hが>さん、話せて嬉しかったです、ジェyson、日本来たら面倒見てやるよ、姉〇夫妻、またみんなでゲームしましょうね、そしてリアナ、またきっと会いに行くよ。みんな、こんなワガママな奴に付合ってくれて、本当に有難うございました。感謝しています。

そして、これからもヨロピク！



[GO to TOP PAGE](#)